

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

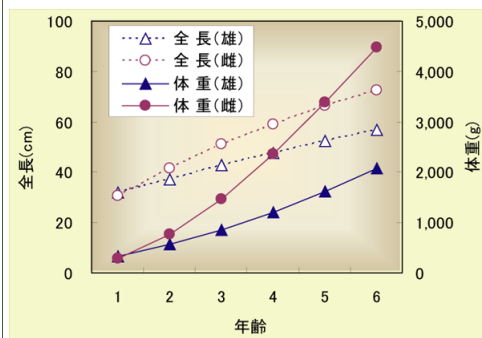
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄10歳以上、雌20歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳以上、雌3歳以上
産卵期・産卵場: 5～8月、沿岸各地の粗砂および砂礫(水深20～30m)
索餌期・索餌場: 沿岸各地の水深30m以深の陸棚
食性: 着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類
捕食者: 着底直後の稚魚は大型魚や甲殻類

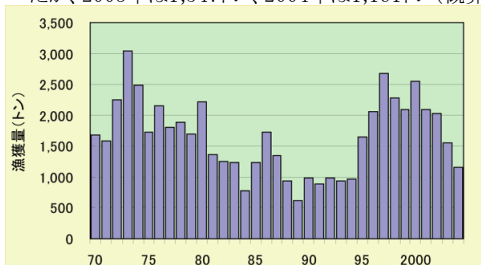


漁業の特徴

小型底びき網、刺し網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁法により漁獲物の体長組成は異なるが、全般的に45cm以下(1+、2+歳)が漁獲物の大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30または35cm以上)が、各県で実施されている。また、ヒラメは高級魚であり、各県において種苗放流が盛んに行われている(2003年約450万尾)。

漁獲の動向

青森県太平洋側～茨城県における1988～1994年のヒラメの漁獲量は、1,000トン弱程度で推移していたが、1995年以降は増加傾向を示し、1997年には2,674トンに達した。その後、1998～2002年は2,000～2,600トンで推移していたが、2003年は1,547トン、2004年は1,161トン(概算値)に落ち込んだ。

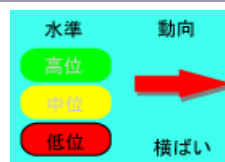


資源評価法

複数年にわたり採集した標本を用いて作成したage-length keyを用い、福島県(1990～2003漁獲年度)の水揚げデータより雌雄別年齢別漁獲尾数を算定した。このデータを用いて雌雄別のコホート解析を行い、雌雄別年齢別の資源尾数を推定した。

資源状態

1980年代後半～90年代前半において低水準であった資源量は、1994、95年に発生した卓越年級により急増した。その後の加入量水準は比較的高く、2000年までの年級群豊度は高い水準を維持していた。2000年以降加入量は減少し、2002年に最低となった後、2003、2004年は加入量が増加した。2003年の資源量水準は1990年代後半と比べると大幅に減少している。



漁獲期間	1+歳		2+歳	
	雄	雌	雄	雌
2003年1～6月	44,569	58,919	57,907	47,561
2003年7～12月	15,245	17,966	17,652	13,660
2004年1～6月	21,002	16,249	22,837	9,870
2004年7～12月	36,966	39,461		

2003～04年に福島県で漁獲されたヒラメ1+歳と2+歳の漁獲尾数。漁獲尾数は6月と10月に作成した雌雄別age-length keyを用いて推定した。年齢は7月で1歳加齢する。赤色で示した数字は2002年級である。同じ年齢時の漁獲尾数を比較すると、2001年級(2003年7～12月、2+歳)は2002年級(2004年7～12月、2+歳)の3.2倍、2003年級(2004年7～12月、1+歳)は2002年級(2003年7～12月、1+歳)の2.3倍であった。漁獲尾数は年級豊度の指標となることから、2003年級の加入量は2002年級の2倍程度と推定される。

管理方策

1960年以降の漁獲量の推移から、10年に1度程度の頻度で発生する卓越年級によって資源量が急増し、その後数年でそれ以前の水準に戻ることを繰り返していると推察される。卓越年級の発生確率を少しでも高くすることと、卓越年

級が発生しなくても漁獲量を長期にわたり中～高水準に保つために、産卵親魚量、または繁殖成功度が高いと思われる高齢魚の資源量を一定レベル以上に維持することが重要である。5年後(2010年)の産卵親魚量(雌のみ)が1990年以降の中位水準となることを目標として、Flimitを設定した。また漁獲物の全長制限は、産卵親魚量の維持と資源の有効利用の観点から重要である。

	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1,160トン	Fsim	0.59	42%
ABCtarget	1,090トン	0.8Fsim	0.47	37%

- 10トン未満を四捨五入
- $Fsim = 0.69 \cdot Fcurrent$

資源評価のまとめ

- 近年の資源水準は低位、動向は横ばいである
- 2000年以降の年級群豊度は中～低水準である

管理方策のまとめ

- 産卵親魚量を維持するために、漁獲量を1,160トン程度にする
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持する

資源評価は毎年更新されます。